

できた。また、LED といった新しい発光原理に基づく光源の開発が確実に進んでおり、次世代の照明用光源として大いに期待している。21世紀の光源開発の研究テーマは山ほどあるが、光源開発に携わっている若手研究開発者や技術予測に関心のある方々に、本稿が何らかの希望を与え、お役に立てば幸いである。

最後に2001年の技術予測の評価に対してご意見があればお聞きしたい。特に、次世代光源システム研究調査委員会の委員の方々には、評価に見解を異にされる方がおられたら、その際はお許しください。なお、表1の作成に当り、資料(ランプカタログ)を提供して下さったランプメーカーの方に感謝致します。

参考文献

- (1) 照明学会：光源システムの技術動向と展望(1990)。
- (2) 只野編：ソフト・テクノロジー—企業戦略のための技術予測と実

- 例一、丸善(1972)。
- (3) 照明学会：光源の評価・性能・材料(1972)。
- (4) Willowghby, A. H.: Light. Res. Technol., 1-2, p.69 (1969)。
- (5) 小原章男：光源の技術予測, 第4回技術予測シンポジウム予稿(1975)。
- (6) Brett, J. et al: J. Illum.Engng.Soc., 6-7, p.197 (1980)。
- (7) Bigio, L.: Proc. of 8th Int. Sym. on Sci. & Tech. of Light Source, pp.188-189 (1998)。
- (8) Waymouth, J. F.: J. Light & Vis. Env., 13-2, pp.51-68 (1989)。
- (9) 別所誠：電球, 照学誌, 85-1, pp.14-15 (2001)。
- (10) 斉藤毅：HID ランプ, その他, 照学誌, 85-1, pp.16-18 (2001)。
- (11) 石神敏彦：無電極ランプの現状と将来, 照学誌, 85-9, pp.764-768 (2001)。
- (12) 中村修二：電子情報通信学会誌, 76-9, pp.913-917 (1993)。
- (13) 坂東ほか：第286回蛍光体同学会講演予稿, pp.17-24 (2001)。
- (14) 田口常正：白色LEDによる21世紀のあかり, 照学誌, 85-7, pp.496-501 (2001)。

〈学会予測〉

照明学会のIT化の予測

Predictions on Information Technology Utilization for the IEI-Japan

◀キーワード：IT化, 会員向けの情報発信, 学会誌の電子雑誌化

今回の特集号の記事として、編集委員長から「IT化の未来予測をするように」との注文があったのでこの記事執筆することになったが、考えてみるとこれはなかなか大変なことである。IT化に対する予測は色々な人たちが、各種のメディアをとおしてそれぞれの立場から論じているが、楽観論、悲観論とりまぜて非常に幅の広いものとなっていて、正直なところ、どれを信じたら良いのか迷ってしまうのが現状であろう。つまり、ハードウェアとしての情報技術の刷新速度が極めて大きくて、それによって運用面がどのようになるのか見当がつけにくくなっているのではないだろうか。

問題を照明学会の中だけに絞ってこのことを考えてみても、すくなくとも筆者にはさっぱりIT化の未来が見えてこないのである。というのは、筆者のような年代になると思考の幅がどうしても過去の経験の蓄積に制約されてしまっていて、過去の事象の延長線上から外れることができにくくなってしまっている。IT化の速度がもし今のままで進むとすると、数年先に起こるであろうことは恐らく筆者の経験の外挿線上からはるかに離れたものになることは疑いなく思われる。しかし、ここにきて、幸か不幸か俄かにIT不況が叫ばれるようになってきたが、その裏には案外筆者の抱いているようなIT化への畏れと漠然とした不安感があるのかも知れない。

中川 靖夫

Yasuo Nakagawa

参与



1934年生。1957年東京都立大学工学部電気工学科卒。1965年埼玉大学助教授。1975年同教授。現在、同大学名誉教授。工学博士。情報化推進委員会委員長。

ともあれ、ここで筆者なりに問題を照明学会の運営面に限ってIT化の予測を立ててみよう。予測がもっともしやすいのは、会員向けの情報の発信であって、回線の容量と伝送速度、メモリー容量さえ確保できれば、学会事務局で入手した情報はリアルタイムで個々の会員に届けられるようになるであろう。但しこれは「技術的には」というカッコ付の話で、この後に「回線使用料金とハードウェアの価格が現在の水準のままで」と「全ての会員が十分な性能の端末機をもてば」という但し書きが必要になる。これに対しては、携帯電話がその機能を満たすのではないかという答えが返ってくるかもしれない、実際、会費の払込や、各種の事業(研究会、講習会、見学会、助成事業など)への申し込みなどには十分対応できるであろうが、それ以上の学術情報などの伝達が携帯電話でレジャー情報を調べるようにできるであろうか。どうも筆者はそこまで楽観的になることはできない。

次に考えられること、あるいは考えなくては行けないことは、学会誌のIT化対応であろう。つまり、学会誌の電子雑誌化である。これも技術的には学会ホームページの拡大化の一環として可能なことではある。しかし、このことは「出版物とは何であるか」という理念の問題と、知的所有権に関わって生ずるであろう様々な問題を予測して解決することの決着がつかないと簡単にできること

ではないように思われる。

過日、ある雑誌にある作家が、「これは妄想かもしれないが」とことわって、次のような趣旨のことを書かれていた。もし、出版物のIT化が進んで、インターネット上に作家などの文章がそのまま載るようになると、出版文化は中世の写本の時代に戻ってしまうのではないか、それは、回線上からそのまま、プリントアウトできて今までの形の書物がなくなることのほかに、プリントアウトする人間（写筆者）が、かつての写筆者がそうであったように、もとの文章を恣意的に改変して異本をつくり、それを流布することが容易にできるようになって、オリジナルがどうであるのか、異本は原作者の著作権に属するのかどうかなど判定が困難な事態が続々と生じて文筆業や出版業は存在しえなくなるのではないか、ということである。

ある人の書いているところによると、わが国の古典の一つである「伊勢物語」は数十種の異本があって、原本が分からないばかりか、文章そのものや文節の区切り方などがそれぞれ異なっているそうである。これは数百年の間の筆写でこのようになったのであるが、現在の進歩したITのもとでこのようなことが起これば数年も要しないであろうし、同じようなことが、文学作品の世界だけでなく学術情報の分野で起こらないとはだれしも断言できないであろう。

筆者の考えるところでは、現在以上のIT化のもたらすものは単に技術の問題ではなく、人間の社会意識や、

価値観、文化のあり方に深く関わってくるように思われる。このことはまた、世代によってもずいぶんと異なってくるであろう。したがって、学会のIT化への取り組みも学会活動を支える年代層の推移によって大きく異なるのではなかろうか。裏返して考えると5年後の学会活動を支える層が現在とあまり代わっていないければ純粋な事務的事項（先に挙げた会費の払込のIT化など）以外はあまり変わらないような気がする。

ずいぶん悲観的な予測になってしまっているが、最後に多少楽観的な考えを述べておきたい。「必要は発明の母」と言われるが、実はこれは反対だそうであって、歴史的に見ると史上に残る大発明の多くは、発明者が好奇心のおもむくままに別にこれといった意図もなく作ったものが、後からニーズが生じて社会的必需品にまでなったものだそうである。例えばライト兄弟は「空を飛んでみたい」好奇の欲望から彼らの飛行機を作ったのであって、当時は空をとぶ機械などに対する社会的ニーズなどは全く無かったそうである。つまり「発明は必要の母」なのだそうである。筆者などのITを見る眼にはおそらくライト兄弟をみる当時の一般の人々のようなところが多分にあるのかも知れない。そして、ITという新しい社会システムについて今までのとり組み方や捉え方を離れた新しい必要性を見出せる人たちが学会活動を支えるようになると、IT化による新しい学会活動や事業が生まれてくるのではなかろうか。

〈学会予測〉

国際化された照明学会活動の将来像

An Expected Image of Future International Activity in IEI-Japan

◀キーワード：照明学会、国際化、未来予測

5年後を予想した学会活動の展望について担当している委員会の立場で執筆せよとの編集委員会の要請であるが、10月号の「今日の課題」欄の「学会活動の国際化」で述べたように学会の国際化については息の長い活動が必要であり、5年後に現在の状態からの飛躍的な変化は期待し得ない。そこで本稿ではもう少しスパンを長くとした上で、国際化された学会活動について述べてみたい。

前報で国際化と言う観点から学会の現状と課題について述べた。これらの課題が解決された時の学会活動の姿を希望的な展望として夢見たものとしてお読み頂きたい。

まず海外関係諸団体との連携交流であるが、IT技術の

神谷 茂
Shigeru Kamiya
名誉会員



1932年生。1954年横浜国立大学工学部電気化学科卒。1967年工学博士。現在、光源の科学と技術に関する国際シンポジウム（LS）アドバイザー、国際活動委員会委員長。

進歩にも支えられて活発な情報の交流が行われるようになった。海外での行事やトピックスは学会のホームページで紹介されるとともに毎月の学会誌に掲載され会員に周知される。本年更改された北米照明学会と韓国照明・電気設備学会との交流協定は2004年に延長されたほか、いまや世界の照明大国となった中国の照明学会との間でも協定が結ばれ交流が活発化した。これらの協定団体とはいろいろなテーマについてのJoint Meetingが頻繁に開かれるようになり実質的な交流が進んだ。中国照明学会も北米照明学会と韓国照明・電気設備学会と交流協定を結んだので、4カ国にまたがるJoint Meetingも計画され4協定団体の共同イベントは世界の照明技術進歩の流れの中で重要な役割を果たすものとして注目を集め